

〔報告〕

新型コロナウイルス感染症により老年看護学実習を学内実習とした取り組みと
学生アンケートからの考察

Discussion of gerontological nursing practice for prevention of COVID-19 and
the results of a survey of students

田端 真¹⁾ 清水 律子¹⁾ 竹村 和誠¹⁾ 小松 美砂¹⁾

【要旨】

2020年度の老年看護学実習は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学内実習に変更したため、そこでの取り組みと学生アンケートからの考察について報告する。学内実習は従来の実習方法と内容を軸に、臨地を想定しながら高齢者の状況や場面を設定し関わりや看護が実施できるようにした。また、多くの事例を用いて病院実習と同様に多様な高齢者を知ることができるよう工夫した。実習終了時に実施した無記名自記式アンケートから、学内実習となったことに伴い、学生には病院で実習できなかったことに伴う不安や、高齢者との関わりを通して得る学びの不足があったことが示された。しかし学内実習の特徴として、グループでの検討や自らが援助を受ける高齢者役の体験を通して、老年看護について考えを広げ、学びを深めることができたことも明らかになった。今回得られた知見をもとに、今後はそれぞれの特徴を生かした実習を構築していく必要があると考える。

【キーワード】 新型コロナウイルス感染症 老年看護学実習 学内実習 取り組み 学生アンケート

I. はじめに

2019年12月頃より認知されはじめた新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）は、パンデミックに至り、人々の生活が大きく変わった。教育の場においては、小学校、中学校、高等学校等の一斉臨時休業や、大学のオンライン授業の実施等の従来とは異なる状況を多く経験した。総理大臣官邸・厚生労働省が掲げた3つの密（以下、3密とする）の回避¹⁾をはじめとした様々な感染拡大の防止対策を実施することにより、徐々に対面での授業による教育の機会が確保されてきた。本学においても3密の回避に加えて手指消毒の励行、マスクやフェイスシールドの着用、時差通学等の様々な対策を徹底しながら可能な限り対面での授業や演習を行ってきた。

本学のカリキュラムでは、3年次の9月から翌年の3月にかけて、母性、小児、成人、老年、精神、在宅、公衆衛生の各看護学領域において、およそ2週間ずつ

を1クールとして7クールの実習を行う領域別看護学実習が位置づけられている。領域別看護学実習開始前の2020年8月頃にはCOVID-19の感染拡大は少しずつ抑えられてきたものの、依然として感染拡大の防止に向け日本のみならず全世界が尽力している最中であり、さらに冬季に向けての感染防止対策の構築が求められていた。看護基礎教育における看護学実習は、様々な臨地に向いて実践を通して学ぶものであるため、感染拡大の防止と看護学実習の実施について検討し、適切に対応することが各看護学領域において重要な課題となった。

本学での領域別看護学実習のうち老年看護学領域（以下、老年看護学実習とする）では、地域医療を担う総合病院において高齢者を受け持たせていただき、看護を展開することを従来の実習方法としてきた。しかし、2020年度の老年看護学実習は、COVID-19の感染拡大の防止と教育の質を担保した実習方法につい

1) Makoto TABATA, Ritsuko SHIMIZU, Kazunari TAKEMURA, Misa KOMATSU : 三重県立看護大学

て様々な観点から熟慮と検討を重ねた結果、臨地実習を従来の総合病院で行う実習（以下、病院実習とする）から学内実習に切り替えて実施した。そこで今回、老年看護学実習をはじめ学内実習とした取り組みと、学生アンケートからの考察について報告する。

II. 学内実習とした経緯

COVID-19は、感染経路として飛沫感染を主体とし、接触感染と特別な条件下でのエアロゾル感染が考えられている²⁾。実習施設である総合病院では、院内感染やクラスター発生の予防のため職員は常時医療用サージカルマスクとフェイスシールドを着用し、さらに粉塵、湯気、エアロゾルが発生しうる場合はN95マスクを着用するなどの対策を徹底していた。このような対策を学生も徹底することで、受け持ち高齢者および学生双方の感染の可能性は極めて低くすることができると思われた。しかし、老年看護学実習では、主に循環器、呼吸器、消化器、運動器、脳・神経系のいずれかに疾患を有し、健康障害のある75歳以上の高齢者を受け持たせていただいております、対象が重症化のリスク因子の「65歳以上の高齢者」²⁾であること、感染した際の死亡率は70歳代で7.8%、80歳代以上で17.6%³⁾と高齢になるにつれ高くなることから、高齢者の安全の確保に対する懸念があった。

しかし、まずは病院実習を実施することを前提に、感染拡大を最大限に低下させるための方法として、実習時間と日数の調整、受け持ち方法の調整、ソーシャルディスタンスおよび直接的な接触機会の調整等について熟考した。実習時間の調整は、病院実習に県内外から公共交通機関を利用する学生が多い実情から、往来時の混雑は避けられず有効ではないと思われた。実習日数や接触機会の調整は、高齢者と関わる機会が減少することから、関係性の構築が難しくなり高齢者の理解につながりにくくなると考えられた。さらに、マスクやフェイスシールドを着用した状態でソーシャルディスタンスを考慮して関わることは、視力や聴力等が低下していることの多い高齢者とのコミュニケーションに支障が生じ、高齢者に負担を強いることになると考えられた。つまり、感染拡大の防止対策を優先すると高齢者との関わりを極めて制限することとなり、教育機会の確保と高齢者の安全と安楽の確保の両方を確立することは困難であることが考えられた。

次に学内実習について、病院実習と比較しながら検討した。学内実習は感染拡大の防止のための制限による影響を格段に受けにくい。それだけではなく、実習の方法を工夫することによって、病院実習と同程度の学びや、病院実習とは異なる学習効果も期待できるのではないかと考えた。COVID-19は、高齢者への影響が大きく、全ての人々に対しても及ぼす影響が未知であることが多いゆえに、高齢者と学生にとって安全であることが最も重要であると考えた。そして、教育の質の担保については、学内実習の内容を工夫することにより可能であると判断した。このような経緯のもと、2020年度の老年看護学実習は学内実習に切り替えて実施するに至った。

III. 老年看護学実習の内容

1. 老年看護学実習の目的と考え方

本科目は、高齢者の健康や生活について幅広く理解し、個別性に応じた看護を実践すること、また実践を通して看護の役割を明確化することを目的としている。

老年看護学実習では、高齢者の価値観や意思を尊重し学ぶ姿勢で関わること、高齢者の生活機能に着目し持てる力に働きかける目標志向型思考を取り入れて看護過程を展開することとしている。さらに、高齢者が望む生活を送ることができるように広く生活する環境を捉え、家族や多職種との協働についても考えることとしている。

2. 実習目標と実習方法

1) 実習目標と行動目標

COVID-19の影響により実習方法の変更が生じてもこれまでと同様の目標に到達する観点から、実習目標については従来のものから変更はしなかった。ただし、行動目標については、高齢者との実践的な関わりに関する項目の末尾を「関係を築くことができる」から「考えることができる」、「観察することができる」から「観察項目を整理することができる」、「実践することができる」から「具体的に記述できる」へ学内実習の内容に合わせてそれぞれ変更した。

2) 従来の病院実習の方法と内容

従来の病院実習の方法は、月、火、木、金曜日の8時30分から16時45分までを実習時間、水曜日を自己

学習日とし、1) 原則として、75歳以上の1人の高齢者を受け持ち、高齢者の生活機能を焦点とし看護過程の展開を行う、2) カンファレンスは司会・書記・カンファレンステーマを決め主体的に参加する、3) 実習初日から毎朝、行動目標、行動計画と行動計画の根拠を提出・発表するとしていた。実習内容は、学生が自ら立てる週間・日間の行動計画に基づき、2週間の間に情報収集、アセスメント、関連図のまとめ、看護課題および具体策の立案、実践、評価するものとしていた。さらに目的を明確にしたうえで学生カンファレンスは毎日開催するものとしていた。なお、実習病棟は3病棟であり、4~6人ずつの3グループに編成し、教員3人で担当していた。

3) 学内実習の方法と内容

学内実習の方法は、月から金曜日の10時40分から16時10分までを学内での実習時間とし、従来の病院実習の方法1)、2)、3)を全て踏襲した。しかし、学内実習では実際に高齢者との関わりを持つことができないため、関わりを通しながら高齢者の理解を深める学習方法を構築することは難しい。そこで、学内実習では病院実習での方法と内容を軸に、高齢者の状況や場面を設定して関わりや看護について臨地を想定しながら実施できるようにした。また、従来の2週間の病院実習の流れを踏まえ学内実習の日程を組んだ。

学内実習の日程と内容を表1に示す。学内実習は「看護過程の展開」「看護技術の実施」「テーマカンファレンス」「グループワーク(個人ワーク)」「グループディスカッション・個人課題」から構成した。また、グループ編成や指導体制は従来の病院実習と同様とした。なお、学内実習の日程と内容は、目安や参考とし学生個々の計画に基づき組み換えは可能とした。

「看護過程の展開」は、学生1人につき1つの事例を作成し(事例総数;100事例)、事例を受け持ち高齢者として実践を除いた看護過程の展開を行うこととした。事例については、各担当教員が書籍やこれまでの経験に基づき基本情報、経過、検査結果等を作成した。ここでは、病院実習と同様の条件として、高齢者情報は実習時間内のみの閲覧、基本情報とフローシート以外(例えば、毛髪・口腔内等の外見的状态、血液検査等の生理検査結果等)は、学生から閲覧希望の申告により情報提供を行うこととした。また、高齢者や

家族とのコミュニケーション、心情の把握等のための会話については、教員が高齢者や家族を演じて実施した。さらに、コメディカルから情報を収集したいと申し出があった場合は、担当教員がそのコメディカルを演じて情報を提供した。

「看護技術の実施」は、病院実習で多くが経験する清潔、排泄、食事、姿勢、移動に関わる技術を取り上げた。学生が高齢者役になったりモデル人形を用いて加齢性変化や自立性を考慮した普遍的な高齢者に対する看護技術を実施した。また、清潔と移動に関しては、学生が各自で高齢者の疾患や障害、性格等を設定して個別性に応じて行った。この技術の実施にあたっては、“演習”ではなく病院での高齢者への“実施”であると位置付けた。実施後には高齢者役と観察者からのフィードバックを必須とした。

「テーマカンファレンス」は、高齢者が希望する生活を送るうえで重要となる「家族」と「多職種連携」を題材とした短編事例に基づき行うこととした。短編事例については、看護過程の展開とは異なる事例を各グループ、テーマ毎に作成した(短編事例総数;42事例)。「家族」をテーマとする短編事例については、超高齢社会における多様な家族構成を踏まえて設定し家族支援の在り方について考えられるようにした。また、「多職種連携」については、高齢者が望む生活を支援するために必要な院内外の職種との連携とその在り方について考えられるようにした。テーマカンファレンスの目的や焦点については、学生が決めることとした。

「グループワーク(個人ワーク)」は、病院実習において受け持ち高齢者に対して必ず含まれる要素である「生活リズムの調整」「退院指導」「活動とリハビリテーション」をテーマとして取り上げ、3グループで重複なく振り分けた。グループワークには、「テーマカンファレンス」の短編事例を経過させた状況を作成して用いた(短編事例総数;21事例)。「生活リズムの調整」では、入院による環境の変化や心身への影響を考慮し、高齢者の生活が整うように24時間の生活リズム案を作成するようにした。「退院指導」では、高齢者や家族の能力と価値観に応じて退院後の生活を具体的に考えた指導案を作成するようにした。「活動とリハビリテーション」では、高齢者の残存機能や趣味、他者との交流をいかした企画案を作成するようにした。グ

表1 学内実習の日程と内容

日程		項目	内容	
一週目	月	2	全体オリエンテーション	・オリエンテーション(方法や内容について) ・実習目標の発表、計画発表
		3	看護過程の展開 オリエンテーション	・看護過程の展開について ・事例の決定
		4	看護過程の展開Ⅰ	・情報整理、アセスメント
	火	2	看護過程の展開Ⅱ	・情報整理、アセスメント
		3	看護過程の展開Ⅲ	
		4	看護技術1・2・3事前打ち合わせ	・実施順、役割、タイムスケジュール等を綿密に打ち合わせする
	水	2	看護技術の実施1	・清潔にかかわる看護技術 (清拭、洗髪、部分浴、整容)
		3	看護技術の実施2	
		4	看護技術の実施3	・排泄にかかわる看護技術 (おむつ交換、陰部洗浄、膀胱留置カテーテル管理)
	木	2	看護過程の展開Ⅳ	・関連図、看護の焦点の明確化
		3	カンファレンス(1)	・「多職種連携」に関するテーマを決めて行う
		4	看護過程の展開Ⅴ	・1課題目:看護目標の設定、具体策
	金	2	看護過程の展開Ⅵ	・2課題目:看護目標の設定、具体策
		3	カンファレンス(2)	・「家族への支援」に関するテーマを決めて行う
		4	看護技術4・5・6事前打ち合わせ	・実施順、役割、タイムスケジュール等を綿密に打ち合わせする
二週目	月	2	看護技術の実施4	・食にかかわる看護技術 (口腔ケア、義歯洗浄、胃ろう・経鼻胃管、嚥下訓練)
		3	看護技術の実施5	・姿勢(体位)にかかわる看護技術 (ポジショニング、体位変換)
		4	看護技術の実施6	・移動にかかわる看護技術 (ポジショニング、体位変換、移乗・移動、関節可動域訓練)
	火	2	グループワークオリエンテーション	3テーマを各グループに分けて行う a.生活リズムの調整、b.退院指導、c.活動とリハビリテーション
		3	個人ワーク①	・グループワークに向けて、個人で案を作成する
		4	個人ワーク②	
	水	2	グループワーク①	・個人で作成した案を発表し、意見をまとめる
		3	グループワーク②	・グループでの案を作成する
		4	グループワーク③	・発表の準備を行う (方法・内容、工夫点、注意・留意事項など発表できるようにする)
	木	2	グループワーク発表	・各グループの発表を行う
		3	看護過程の展開Ⅶ	・SOAP (これまでの技術・GWの中から計画の中にあるものを実施したものとする)
		4	グループディスカッション	・高齢者との関わりを通して理解した高齢者について意見交換を行う
	金	2	個人課題	・「私にとって高齢者を看護することとは」をテーマに 自己分析を含めて1400字～2000字で小論文を作成する
		3	まとめ・学びの発表	・実習を通して学んだことを発表し、意見交換を行う
		4	記録の整理	・記録を整理し実習終了時に各担当教員に記録を提出する

グループワークにあたり、それぞれの考えを持って意見交換が行えるよう、事前に個人ワークとして各自が担当するテーマの案を作成することとした。このグループワークを通して実践できる段階まで具体的にすることとした。また、具体的な案を作成するうえで必要な

情報の追加は認めた(例えば、生活習慣や望み、趣味等)。グループワーク発表では、それぞれのテーマについて各自が実施できる段階まで十分理解ができるよう積極的な質疑応答と検討を含めた。

「グループディスカッション・個人課題」は、広く

高齢者について知り、高齢者に関する理解を深め、高齢者を看護する自身のあり方を考える機会とした。老年看護学実習の期間中は、感染拡大の防止対策を徹底しながら各々の可能な範囲で積極的に身近な高齢者と関わることを実習初日に周知した。数多くの高齢者を知り理解を深める機会として、実習期間を含めたこれまでの関わりや感じたことなどについてディスカッションを行うこととした。そして、実習のまとめとして、自らのこれまでの高齢者とのコミュニケーションや関わる姿勢等を省みて高齢者への看護について熟考するよう個人課題として実習終盤に小論文の作成を取り入れた。

今回の学内実習では、短編事例を含め多くの高齢者の事例を作成した。従来の病院実習では、大部屋内、廊下、ロビー等で多くの高齢者を見たり、病棟カンファレンスや多職種会議等においての多くの高齢者の情報を聞いたりする機会がある。つまり、実習期間中に学生は、受け持ち高齢者以外の多様な高齢者について知ることができる。そこで、学内実習では多くの事例を用いて病院実習と同様に多様な高齢者を知り、必要な看護について考えられるようにした。

IV. 学内実習に関する学生へのアンケート

1. アンケートの方法と内容

老年看護学実習を終了した3年生に対して、学内実習に関する無記名自記式アンケートを実施した。アンケートは、各クールの実習最終日に文書と口頭にて説明を行ったうえで、グループリーダーに学生数分を手渡して配布した。回収は、グループリーダーに渡した封筒にまとめて入れて付属のテープで封をし、17時までに代表者によって所定の回収ボックスへ投函してもらう方法とした。

アンケートの内容は、「実習全体」「看護過程の展開」「看護技術の実施」「テーマカンファレンス」「グループワーク（個人ワーク）」「グループディスカッション・個人課題」に関する17項目について、それぞれ5段階からの回答と、前述項目についての自由記述、本実習に関する感想等の自由記述とした。

2. 倫理的配慮

アンケートについて、口頭および文書により目的、方法、倫理的配慮について説明を行った。アンケート

への協力は自由意思によること、協力しなくても何ら不利益（評価や成績への影響）は生じないことを説明した。また、アンケートへの協力に関して、教員からの強制力が働くことのないように、回収はグループリーダーに依頼した。

アンケートは、無記名自記式で行い、グループリーダーに渡した封筒にまとめて入れて付属のテープで封をし、所定のボックスへ提出してもらった。さらに、アンケートには結果公表への同意確認欄を設け、チェックのあったもののみ調査へ同意が得られたものとして取り扱った。

さらに、筆跡によって個人が特定されないよう封筒の開封からデータ入力まで代行業者に依頼し、原本と入力データの確認は実習指導に当たらなかった教員が行った。また、得られたデータは、パスワードでロックした電子媒体へ保存し、電子媒体は鍵のかかる堅固な戸棚で保管することとした。

V. 学内実習のアンケート結果

1. アンケートの回収と集計

アンケートは99部配布し、回収は94部（回収率：94.9%）であった。データを公表することへの同意確認欄にチェックがないものを除外し、82部（有効回答率：82.8%）を用いた。選択項目については単純集計し、自由記述については学内実習への変更に伴う学びや感想をコードとして抽出し、カテゴリ化した。

2. アンケートの選択項目の集計結果

学内実習の方法と内容に関する学生のアンケート結果について表2に示す。「実習全体」「看護過程の展開」「看護技術の実施」「テーマカンファレンス」「グループワーク（個人ワーク）」「グループディスカッション・個人課題」の全ての項目で、回答5段階中で2番目に評価の高い「到達」「満足」「できた」「深まった」「そう思う」が最も多かった。

「看護技術の実施」「テーマカンファレンス」「グループワーク（個人ワーク）」「グループディスカッション・個人課題」についての項目は回答5段階中で最も評価の高い「十分」が次いで多かった。「実習全体」「看護過程の展開」についての項目は回答5段階中で3番目にあたる「少し」が次いで多かった。

表2 学内実習の方法と内容に関する学生のアンケート結果

n=82(%)

実習全体について						
	十分 到達できた	到達できた	少し 到達できた	あまり到達 できなかった	到達 なかった	無回答
老年看護学の実習目標に到達できましたか	17 (20.7)	48 (58.5)	14 (17.1)	2 (2.4)	0 (0.0)	1 (1.2)
本実習に満足しましたか	11 (13.4)	40 (48.8)	24 (29.3)	5 (6.1)	1 (1.2)	1 (1.2)
臨地(病院)を想定した実習ができましたか	9 (11.0)	39 (47.6)	25 (30.5)	7 (8.5)	1 (1.2)	1 (1.2)
看護過程の展開について						
	十分深まった	深まった	少し深まった	あまり深まら なかった	深まら なかった	無回答
事例によって入院・治療が必要な高齢者に対する理解が深まりましたか	22 (26.8)	43 (52.4)	16 (19.5)	1 (1.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
必要な情報を自ら収集することによってあなたの情報収集力が高まったと思いますか	15 (18.3)	30 (36.6)	23 (28.0)	12 (14.6)	2 (2.4)	0 (0.0)
教員から情報を収集する際、高齢者を想定して関わることができましたか	16 (19.5)	34 (41.5)	20 (24.4)	12 (14.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
事例の情報について高齢者の状況の変化を捉えることができましたか	13 (15.9)	34 (41.5)	27 (32.9)	6 (7.3)	2 (2.4)	0 (0.0)
看護技術について						
	十分できた	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった	無回答
高齢者の特徴を踏まえて看護技術を実施できましたか	20 (24.4)	41 (50.0)	16 (19.5)	4 (4.9)	1 (1.2)	0 (0.0)
高齢者役の体験によって高齢者の気持ちを考えることができましたか	28 (34.1)	35 (42.7)	14 (17.1)	5 (6.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
テーマカンファレンスについて						
	十分できた	できた	少しできた	あまり できなかった	できなかった	無回答
短編事例によって「多職種連携」について学びを深めることができましたか	30 (36.6)	43 (52.4)	5 (6.1)	3 (3.7)	1 (1.2)	0 (0.0)
短編事例によって「家族への支援」について学びを深めることができましたか	34 (41.5)	39 (47.6)	4 (4.9)	3 (3.7)	1 (1.2)	1 (1.2)
グループワークについて						
	とても そう思う	そう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	思わない	無回答
短編事例はグループのテーマに関する学びにつながったと思いますか	24 (29.3)	46 (56.1)	9 (11.0)	2 (2.4)	0 (0.0)	1 (1.2)
グループワークによって高齢者看護に関する学びを深めることができたと思いますか	23 (28.0)	47 (57.3)	9 (11.0)	1 (1.2)	1 (1.2)	1 (1.2)
各グループの発表を通して高齢者看護に関する学びを深めることができたと思いますか	28 (34.1)	45 (54.9)	7 (8.5)	1 (1.2)	0 (0.0)	1 (1.2)
グループディスカッション・個人課題について						
	とても そう思う	そう思う	少しそう思う	あまり そう思わない	思わない	無回答
グループディスカッションを通して、高齢者の理解を深めることができたと思いますか	23 (28.0)	41 (50.0)	15 (18.3)	1 (1.2)	0 (0.0)	2 (2.4)
身近な高齢者と関わることができましたか	15 (18.3)	23 (28.0)	15 (18.3)	20 (24.4)	7 (8.5)	2 (2.4)
小論文の作成によって「高齢者を看護すること」について自己の考えを整理することができましたか	15 (18.3)	44 (53.7)	14 (17.1)	7 (8.5)	0 (0.0)	2 (2.4)

濃灰色:最も多かった回答
薄灰色:2番目に多かった回答

3. アンケートの自由記述の集計結果

老年看護学実習が病院から学内に変更したことに伴う学生の思いを表3に示す。自由記述のコードは77であり、20サブカテゴリと【グループメンバーや教員との関わりを通して得た学び】【高齢者役の体験を通して得た学び】【実習場所の変更に伴う負担の軽減】【実習内容の工夫に伴う学びの深まり】【高齢者との関わりを通して得る学びの不足】【病院で実習できなかったことに伴う不安】【実習場所の変更に伴う負担】の7カテゴリが抽出された。

たことに伴う不安】【実習場所の変更に伴う負担】の7カテゴリが抽出された。

VI. 考察

1. 学内実習での学びの特徴

学内実習の方法と内容に関する学生のアンケート結果では、特に「看護技術の実施」「テーマカンファレンス」「グループワーク（個人ワーク）」「グループディ

表3 老年看護学実習が病院から学内に変更したことに伴う学生の思い

カテゴリ	サブカテゴリ	主なコード
グループメンバーや教員との関わりを通して得た学び	カンファレンスを通して学びが深まった	高齢者と関わることができなくなったのは残念だったが、その分グループでの意見交換やカンファレンスで学びを深めることができた。
	身近な高齢者との体験を学生間で共有できた	グループメンバーと家族内で起きた経験を共有できたため、実際に病院に行っていたら経験していたであろう事実について知ることができてよかった。
	教員の指導を受ける時間が増えた	病院では更に時間のゆとりがなく、流れていってしまいそうなことや細かい点まで、学内では教員に指導してもらえたため、自分のためになった。
高齢者役の体験を通して得た学び	高齢者役の体験から援助される高齢者の気持ちを考えることができた	看護師としての学びだけでなく、患者として感じる気持ちについても学ぶことができたため、今後も技術の提供する際に、高齢者の気持ちを忘れないようにしたい。
	高齢者役の体験から自分のケアを振り返ることができた	高齢者の気持ちになって患者役を行うことで、自分の技術の改善点を見つめることができたため、有意義であった。
実習場所の変更に伴う負担の軽減	高齢者や自分の家族に感染させるリスクが減った	家族に高齢者がいるので、自分ももってくることなく生活できるので、学内になって安心した。
	通学時間が短くなった	自宅から近くなり、通学時間が短くなってよかった。
	慣れた場所で実習を行うことができた	求められる課題や実習の雰囲気、精神的・身体的負担が、見慣れた場所で行うことで少し緩和された。
実習内容の工夫に伴う学びの深まり	病院を想定した実習内容により学びが深まった	学内になると少し気がゆるんでしまうと思ったが、病棟と同様に毎朝、挨拶や行動計画を発表することで、病院実習と同じ緊張感で行うことができた。
	教員による実習内容の工夫を感じた	学生が多くの学びができるようにと、教員が準備したことがよく分かる実習だった。
	高齢者との関わりをもてないことが残念だった	実際に高齢者と関わることでわからないことも多いと思うのでその点が残念だった。
高齢者との関わりを通して得る学びの不足	高齢者との関わりから得られる感動がなかった	高齢者との関係がなかったから、感動が今までよりなかった。
	高齢者との関わりがないためアセスメントが難しかった	高齢者とコミュニケーションをとることができなかったため、その人を深く知ることができず、アセスメントのときに思いや望みを考えるのに戸惑った。
	高齢者との関わりがないため看護計画の立案が難しかった	実際に目の前に高齢者がいないため、主観的情報を得ることが難しく、計画立案時に、本当にこの計画が適しているのか判断しづらかった。
	実際の高齢者をイメージすることが難しかった	患者をイメージすることはできたが、高齢者をイメージすることは難しかった。
病院で実習できなかったことに伴う不安	できれば病院で実習したかった	病棟で実際に関わってみないとわからないことも多く、将来の希望の病棟の選択やスキルを身に付けるために、できれば病棟に行きたかった。
	就職後に影響を及ぼすのではないかと不安に感じた	臨地での経験が不足してしまうことで自分の学びが浅くなり、将来に影響を及ぼすのではないかと不安だった。
実習場所の変更に伴う負担	看護過程の展開が大変だった	臨地と異なり学内は帰学日がなかったため、記録を整理できず、疲労の蓄積があった。
	看護技術の実施が大変だった	学内の方が実施する技術が多く、初めて実施する技術もあって大変だった。

スカッション・個人課題」に関する評価が高い傾向にあった。今回の学内実習では、グループで取り組む方法を多く取り入れたことから、グループで検討する項目の評価が高かったといえる。COVID-19の感染拡大の防止のためオンラインや学内実習とした先行研究では、ほかの学生の思考、多様な意見により視野が広がり学びの深まりが得られたと報告されており^{4,5)}、本学の学生アンケート結果においても同様に、学生が【グループメンバーや教員との関わりを通して得た学び】を実感していることが示された。従来の病院実習では、目の前の高齢者への関わりや看護の実践を通して学びを深めていく。しかし、病院実習と学内実習の大きな違いは、目の前に実在する受け持ち高齢者の有無にあり、学内実習では目の前の高齢者からの反応は得られない。そこで、学内実習においては、学生は積極的にグループでの検討に取り組み、様々な他者からの意見を得ることにより、高齢者や看護に対する自らの考えを広げたり深めたりして学びとする特徴があると考えられる。

また、学内実習での学びの特徴として【高齢者役の体験を通して得た学び】があげられる。従来の病院実習では看護技術を実施する体験が主となるのに対し、学内実習では自らが高齢者となって援助を受ける体験をする機会も多くあったことから、看護者、高齢者双方の視点で考えを深めることができたと考える。さらに、【実習場所の変更に伴う負担の軽減】も学内実習における特徴の一つと考えられる。今年度はCOVID-19の感染への不安がある中で実習を行わなければならない状況であった。学内では3密の回避等の感染拡大の防止対策を徹底しており、さらに学生自らの意思で感染予防行動をとりやすい環境であったことから、安心して学習できる環境であったと考えられる。そのうえ、学内実習の場合、不慣れな場所や状況であることによる戸惑いは病院実習と比較して生じにくく、落ち着いて学習することができる状況であったといえる。したがって、学内であったことにより、学生が考えや学びを深めるのに適した環境や状況であったと考えられる。これらのことから、学内実習はグループでの積極的な検討を通して高齢者やその看護について多角的に捉え、落ち着いてじっくり考えることができるため、整理しながら着実な学びとしていけるものであると考える。

2. 学内実習の評価

文部科学省・厚生労働省からの「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について」では、教育内容の縮減を認めるものではなく、学内での演習により代替する場合は、シミュレーション機器や模擬患者等を用いて、日々変化する患者の状態をアセスメントする演習や、学生同士による実技演習、患者とのコミュニケーション能力を養う演習等、可能な限り臨地に近い状況の設定をし、演習を行うことと示されている⁶⁾。このためには、学内実習には様々な工夫が必要となる。さらに、病院実習では目の前に存在する高齢者に対して看護を展開することが明確であるため主体的な実習となりやすいが、学内実習をプログラム化することにより学生が主体的に取り組みにくいことも考えられた。そこで、学内実習はこれまでの病院実習での内容を軸に、学生個々に異なった事例による看護過程の展開、高齢者に多く用いる看護技術の実施、具体的事例を用いたカンファレンス等により、現実に即して満遍なく構成した。また、学生が自ら必要な行動は何か考えて実習を進めることができるよう、受け持ち高齢者情報の提示や課題の提示が一方的にならないよう、学生の必要性に応じて情報を提供したり、学生自身の計画に基づき調整できるよう実習日程を柔軟に設定するなど、学生の主体性に委ねるような工夫を随所に取り入れた。さらに、学内実習では、病院実習のような目まぐるしい変化はないことから、他の学生の体験の共有や自らの振り返りを通して、高齢者やその看護についてより深く考察する課題も取り入れた。

学内実習の方法と内容に関する学生のアンケート結果では、全ての項目で5段階中2番目に評価の高い「到達」「満足」「できた」「深まった」「そう思う」が最も多かったことから、学生が従来の実習目標に到達し、満足感を得る実習であったと思われる。また、老年看護学実習が病院から学内に変更したことに伴う学生の思いとして、【実習内容の工夫に伴う学びの深まり】が得られたことから、今回の老年看護学実習は、学内という従来とは異なった状況下であったが、高齢者の理解や看護の役割に関する学びを深めることができる方法と内容であったと評価する。

3. 今後の展望と課題

老年看護学領域におけるはじめての学内実習の取り組みにより、学生が他の学生の思考を取り入れることで多様な考えを学ぶことや、安心して落ち着いて学べる環境や状況を作ることによって学びを深めることがわかった。老年看護学実習では、高齢者の健康や生活を幅広く理解するために、臨地に身を置き、その状況の中で様々なことを自ら考え学ぶことも大切なことではあるが、臨地の場においても学生同士の積極的な意見交換の場の設定や、時には学生が落ち着いて考えられるような環境と状況を設定することを取り入れ、学習効果があがるよう工夫をしていくことが重要であると考えられる。

一方で、老年看護学実習が病院から学内に変更したことに伴う学生の思いとして【高齢者との関わりを通して得る学びの不足】【病院で実習できなかったことに伴う不安】があり、高齢者と実際に関わって様々な体験をすることは、代替することが非常に困難なものであるといえる。今回のCOVID-19による看護学実習への影響は大きく、特に老年看護学領域では臨地での実習を中止した大学が多い⁷⁾。しかし、オンライン実習⁴⁾やオンラインと通常の実習を組み合わせたハイブリッド型の実習⁸⁾等、多様な実習方法により臨地との関わりを確保した取り組みと学習成果も報告されている。したがって、どのような状況であっても可能な限り臨地で生活する高齢者と関わるができる環境や状況を整備していくことが重要な課題であると考えられる。さらに、【実習場所の変更に伴う負担】のように、学生は臨地であっても学内であっても実習場所に伴う負担があると考えられるため、実習では学生の思いを受け入れ理解していくことも重要であると考えられる。

Ⅶ. まとめ

COVID-19によって、老年看護学実習をはじめて学内実習として実施したが、学内の特徴をいかしながら高齢者の理解や看護の役割に関する学びを深めることができたと考えられる。また、病院実習では実際の高齢者との関わりを通して様々な体験ができることが大きなメリットであり、学内実習では多角的な検討を通し

て落ち着いて考えを深められることが大きなメリットであると考えられた。今後は、従来の病院実習の方法にとらわれず今回の得られた知見をもとにそれぞれの良さをいかした実習を構築していく必要があると考えられる。さらに、いかなる状況であっても高齢者との関わりを通して学べるように工夫をし、効果的な教育ができるよう検討し続けていきたい。

【文 献】

- 1) 首相官邸：3つの密を避けるための手引き，2021.2.10，<http://www.kantei.go.jp/jp/content/000062771.pdf>
- 2) 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症COVID-19診療の手引き第3版，2021.2.10，<https://www.mhlw.go.jp/content/000668291.pdf>
- 3) 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の国内発生動向，2021.2.10，<https://www.mhlw.go.jp/content/10906000/000663883.pdf>
- 4) 坪井桂子，秋定真有，石橋信江，他：オンラインの特性を活かした老年看護学実習，看護教育，61(10)，940-947，2020.
- 5) 長谷川和子，佐々木裕子，佐藤ユキ子：母性看護学・成人看護学臨地実習の代替策，看護展望，45(13)，40-45，2020.
- 6) 文部科学省，厚生労働省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について，2021.2.10，https://www.mext.go.jp/content/20200624-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
- 7) 日本看護系大学協議会：【調査B】2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果(科目別)，2021.2.10，https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_survey-Breport.pdf
- 8) 益田美津美，小田嶋裕輝：3・4バーチャル・シミュレーションを用いたハイブリッド型成人看護学実習の取り組み，医学教育，51(5)，557-560，2020.